

BOOK TRAIN

ブックトレイン

千代田図書館
学校支援担当発行
夏の図書だより
2015
中学生版

中学生の皆さんにおすすめの本を紹介します。



のマークは気軽に読める本、



のマークは読みごたえのある本です。



『ペンダーウィックの四姉妹 夏の魔法』



ジーン・パズオール/作 代田亜香子/訳 小峰書店

程よく仲良く、程よく仲の悪い四姉妹の合言葉は

「ペンダーウィック家の名誉^{めいよ}にかけて！」

とろけるようなバター色のコテージと美しい屋敷、広大な庭で繰り広げられる、明るく個性的な四姉妹のみずみずしいひと夏の物語。運命に^{みちび}導かれるように始まった、その年の夏休みは、四姉妹に真夏の冒険と淡い初恋、それから少しの成長をもたらした。限られた時間の中のきらきらとした輝きをぎゅっと詰め込んだようなお話。



『遠野物語 remix』



京極夏彦 柳田國男/著 角川学芸出版

「この遠野郷^{とのおごう}に^{つた}傳はる物語は百年を経て色褪^{いろあ}せることなし」

山男・山女、赤い顔の河童、天狗に座敷童子^{ざしきわらし}…現在の岩手県遠野市周辺の神や死者、異界のものたちについての伝承を、日本民俗学の先駆者^{せんくしゅ}・柳田國男が聞きとり集め、1910年に発表した『遠野物語』。その遠野物語を京極夏彦が現代語訳し、構成も読みやすく入れ替え「リミックス」した。淡々と語られる幻想的な世界に、ずっと背筋が冷たくなる。



『花や咲く咲く』



あさのあつこ/作 実業之日本社

戦時中の女の子だって、かわいい服やおしゃべりが大好きだった。

太平洋戦争が激しさを増す昭和18年。モンペ以外の服を着ることは許されず、甘いお菓子もなかなか食べられない。女学生の三美^{みらみ}たち4人は、思いがけず手に入れた上等な布で、こっそりと華やかなブラウスを縫った。やがて三美^{みらみ}たちは、^{がくとどうい}学徒動員で別々の場所に行くことになり…。

苛酷^{かこく}な戦時下でも笑顔や夢を失わなかった、少女たちの青春小説。





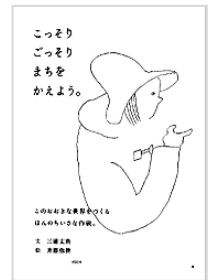
『こっそりこっそりまちをかえよう。』



三浦丈典/文 斉藤弥世/絵 彰国社

このおおきな世界をつくるほんのささやかな作戦、大集結。

「自分がねこだったら近所のどこで昼寝するか考えてみよう」「自分のいえに最高何人泊まれるか、一度実験してみよう」「東京じゅうの人が全員参加できるマラソン大会を企画してみよう」など、建築家である作者がまちをさりげなく、かつ大胆に変えるための提案を読者に投げかける。考えてみるだけでワクワクするような作戦、43を収録。新しい視点が知らなかった世界へ手を引いてくれる、そんな1冊。



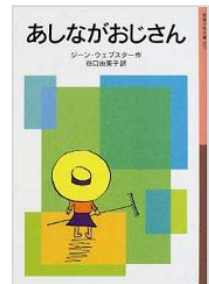
『あしながおじさん』



ジーン・ウェブスター/作 谷口由美子/訳 岩波書店

最近、だれかに手紙を書きましたか？

孤児院育ちのジュディは、ある日院長に呼ばれ「ある評議員さんがあなたを大学へ行かせてくれる」と告げられる。ただし、月に1度必ず手紙を書くという条件付きで。その人の名前も知らないジュディは「あしながおじさん」と呼び、いつか会えることを夢見て手紙を書き続ける。その正体とは…。ジュディがあしながおじさんへ書いた手紙を読む形式で物語は進む。くすっと笑えて心があたたかくなる名作。



『センス・オブ・ワンダー』



レイチェル・カーソン/著 上遠恵子/訳 新潮社

「準備はいらない、感じてみて。
こんな不思議に満ちた世界に私たちはいるのだから」

「センス・オブ・ワンダー」とは不思議さに驚嘆する感性のこと。著者は月光の下で、雨の森の中で、時には都会の街角でさえ、自然の神秘を受け取れるのだと語りかける。さらにそれを感じ取れる人は、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれる事は決してないと静かに説く。米国初出版から半世紀を経てもなおロングセラーであり続ける珠玉の書。



『大人はどうして働くの？』



宮本恵理子/編・著 日経BP社

なんとなく「大人になるってなんだかなあ…」と思っている君へ。

「大人はどうして働くの？」もちろんお金を稼ぐため。でもそれだけじゃない。この質問に、有川浩や池上彰など、様々な分野で活躍中の7人が各自の経験を交えながらわかりやすく答えていく。子ども時代に見えなくても、大人になった今だから伝えられる事がある。【子ども編】と【大人編】の二部構成で、親子で読んでもうなずける、人生の道標となる1冊。

